

朝

露



近藤隆

大きな鯉が跳ねて、水音を立てた。

英向院の大きな池に映った月が、さざ波に洗われるかのように揺れると、広い庭の草木の間で鳴いていた虫の音が止んだ。

本堂横にある庫裡の座敷では、仄暗い行燈の明かりが、碁盤の上に置かれた白黒の石を照らしている。

「うーむ」

腕組みをした山田浅右衛門の口から、溜め息が出た。

「山田様、いくら考えても、私めの勝ちでございますな。この隅の白石は死んでおります。眼が一つしかございません」

しゃがれ声で、住職の開善は碁盤の隅を指さし、浅右衛門をチラと上目遣いに見た。

「開善殿、どうもここで碁を打つと、いかな。儂の石はいつも死ぬ運命かの？」

縞の着流し、茶帯に一尺余りの（約三〇センチ）脇差しを腰に差した浅右衛門は大きな肩を上下し、軽く首を回して開善に愚痴った。

そして額に数筋の皺を寄せ、少し赤みがかった精悍な顔を扇子で何度も煽いだ。

「山田様。それでは、その白石に拙僧めが、一つ戒名をお付けいたしましたしよろしいかな……。ハハハ」

手で口を押さえ、簡素な十徳を着た開善は、達磨のような体軀の肩を何度も揺らして笑った。

「これこれ、縁起でもない。勘弁してくれ、開善殿。これ以上戒名が増えたら困るので」

浅右衛門は何かを思いだしたのか、苦笑いをして、閉じた扇子の先で碁盤の角を軽くパンと叩いた。

「これは、これは冗談が過ぎました。お役目柄のこともあり、誠にご無礼を。お許し下され」  
開善は浅右衛門に向かって一礼し、そのまま赤い頭のとっぺんを、手でつるりと一撫でした。

「いや、いや。実は碁の勝負以外にも、ちと考えることがあったの」

「ほう。どのような？」

少し首を傾げると、浅右衛門がこれから話すことに興味があるのか、開善は大きな耳に手を当て、浅右衛門のほうに頭を近づけた。

「明朝、お奉行様に呼ばれているのだ……」

浅右衛門は顔を少しゆがめると、二三度、角張った顎を強く撫でた。

「お奉行様？ ああ、南の大岡越前守様。して、どのような、ご用件で？」  
矢継ぎ早に開善が訊く。

「内与力殿が拙宅に来られて言うには、用件は、役宅でお奉行が直々に話すとのことでのう、いささか……」

浅右衛門、言葉を濁す。

「いささか？」

「いや、なに、いささか戸惑っておるのだ」

「何をで、ございます」

「大岡様に何を言われるのか、心配なのだ」

浅右衛門は再び腕組みをした。

開善はそれを見て、

「山田様、お刀の試し切りでは？ または罪人の……」

声を低くして、浅右衛門に遠慮しながら訊いた。

「そんな話であれば、まだよいのだが、月番代わりで、お奉行も非番だからのおう。役宅まで来いとのことだから、みっちり油を絞られるかも知れんな。フフ」

自嘲気味に、浅右衛門は笑った。

浅右衛門は將軍家お試し御用役として、將軍家や大名などから預かった刀の試し切りを生業とし、また罪人の死刑執行人も兼ね、世間からは首切り浅右衛門と非常に恐れられていた。

その浅右衛門が心配する様を見て、善開は、

「山田様、まあ一献どうぞ」

酒が入った一升徳利を、太い毛むくじゃらの手で、浅右衛門の横に置いてある大きな杯の傍に持ち上げた。

「頂戴いたす」と言って、大きく節くれ立った手で杯に酒を受け、浅右衛門は一気に呑み干した。

「開善殿、ここの酒は格別に旨いの」

浅右衛門が満足した顔で杯を置くと、

「檀家に大きな酒問屋がありましてな、山田様がここに来られる前に、ご本尊さまからちよいと失敬したのですよ」

本堂に体を向け、開善は片目をつぶり浅右衛門をチラと見て「南無阿弥陀仏」と合掌した。それを見た浅右衛門は渋い顔をして、一つ大きな咳払いをした。

「それはそうと、白黒入れ替えてもう一手所望いたすが、よろしいかな？」  
浅右衛門は開善に尋ねた。

「望むところでございます。お屋敷もご近所でございますし、秋の夜は長うございますから」  
開善は笑みを浮かべ、大きく頷いた。



黒羽二重の紋付き羽織袴。一文字で結んだ紫紺の帯に、大小二本の刀をたばさんだ浅右衛門は、朝早く屋敷を出ると、両手を懐に入れ何か思案をするように、ゆつくりと歩いていた。「それにしても頭が痛い」

独り言が口から出る。

——昨夜、英向院の住職殿と碁を囲み、深酒が過ぎたようだ。

浅右衛門は、ふと、道端の細い竹竿の先に吊された白い布切れに、草餅と金釘流で書いた小さな字を見て、足を茶店の前で止めた。

「ごめん。誰か、おるか？」

浅右衛門は刀を古ぼけた縁台に置くと、茶店の奥に向かって声をかけた。  
しばらくして、

「へえ。ただいま」

奥から、腰が少し曲がった、白髪頭の老翁が出てきた。粗末な茶色の着物を、尻のところで端折りして、少しくたびれた禪が見え隠れした。

浅右衛門は目線を外すと、

「親爺、朝早くから、すまぬな」

と軽く手を上げた。

「いえ、お気遣いなく。この先の旅籠から、朝立ちする者も多いもので、早くから開けておりますので。はい、お武家様」

「そうか。では、すまぬが茶を所望したい。それと草餅を三つくれぬか。ついでに雑巾も借りたい。ぬかるみが多くてのう。これ、このとおりじゃ」

袴を浅右衛門は持ち上げて、白足袋と雪駄に付いた染みを老翁に見せた。

「へい、わかりました。おーい、長吉」

老翁が奥に声をかけた。

「へーい」

奥から、か細い声で返事があり、所々につきはぎのある、色は茶色の少し汚れた薄っぺらの木綿の単衣を着た、背の低い男の子が現れた。

腰紐がゆるいのか、大きな胸当てをしているのが見えた。

頭は前髪と後ろ髪を少し残して、あとは坊主頭に剃られていた。

足は裸足で、汚れているのか、日に焼けた顔より黒かった。

「長吉、奥にいる婆さんに言つて、お武家様に、お茶と草餅を三つお持ちしろ。それと、新しい雑巾も忘れるな」

「へえ」

長吉と呼ばれた男の子は、浅右衛門に軽く頭を下げ、急いで奥へ戻って行った。

「まだ年端もいかぬ子供のようだが、親爺の子か？」

「お武家様、何をおっしゃいます。とつ、とんでもございません。長吉は七つで孫の年。こんな爺や婆に……。実は少し事情がありまして、ここで働いておりますので……」

老爺は大きく手を振り、自分の子でないことを否定すると、何か言いたそうな顔をした。

浅右衛門は老爺から、長吉の身の上話を聞きたくなり、

「ほう。どんな事情やら……。よければ聞かしてくれまいか。他言はせぬ」

身なりも立派な浅右衛門を信用したのか、老爺は余り齒のない口を、数度、もごもごさせると、興奮気味に喋りだした。

「はい、お武家様。実は、あの長吉は、南のお奉行様のお計らいで、ここに來ることになつ

たのでございます」

「えっ、今なんと申した？ 南のお奉行、大岡様のことか？」

浅右衛門は、今から訪ねようとする大岡の名を聞いて、驚いた。

「そうでございます。あの子の父親は、悪党の仲間に入り、とうとう最後には、お縄になって、小塚っ原に晒されるところを、大岡裁きで八丈に遠島になり、命だけは助かったのでございませう」

——遠島にならなければ、この儂が、長吉の父親の首を切っていたかもしれんな。

二三度、肩を上下に首を動かした浅右衛門は、最後に「うむ」と頷いた。

老爺は長吉のいる奥を少し見て、

「病弱な母親の内職だけではやっていけないので、お奉行様が、長屋の大家に働き口を世話するように命じて、ここで働くことになったのでございます」

揉み手をしながら、老爺は長吉の身の上を話した。

「なるほどのう……。しかし、朝早くから感心な子じゃ。そうであつたか。良い話を聞かせてくれた。礼を申す」

「そんな。お礼だなんて、お武家様」

浅右衛門に丁寧な頭を下げて、老爺は奥に入って行った。

——近頃は何処に行っても、大岡様、大岡様だ。人気があるのう。なにより弁が立つからな。それに公方様の信任も厚い。今日は何を言われるやら。用心してかからぬと……。

しばらくして、長吉が「どうぞ、お武家様」と可愛らしい小さな声で、少し縁の欠けた木製のお盆で、お茶と草餅を持ってきた。

お盆の下には、新しい雑巾が長吉の小さな手で押さえられていた。

「おお、長吉か。盆と雑巾はここへ置いてくれ」

懐手をした浅右衛門は、首を少し動かして目で縁台を指した。

そして懐から横長の財布を出すと、小粒を、長吉の手に握らせた。

「あのう……」

と小さな声の長吉。

「なに。礼なぞいらぬぞ。家に帰って母に渡せ。ここの、親爺には黙っておれよ。体に気を付けて、孝行せいよ」

何か言いたそうな長吉の肩を、浅右衛門は二三度、軽く叩いた。

身支度を整えた浅右衛門は、最後の草餅を口に放り込むと、お茶を旨そうに飲み、

「おーい。ここに勘定を置くぞ」

と茶店の奥に声をかけた。

「へえ。ありがとうございます」

浅右衛門が茶店を出ようとすると、老爺が腰を曲げて奥から出てきた。

「お武家様、お武家様。これは、お茶代にしては多すぎます」

大きな声で、浅右衛門の背中に言った。

浅右衛門は手を振り、

「取っておけ。おやじ、あの子の面倒をよく見てやれ」

と茶店をあとにした。



奉行所内にある役宅に着いた浅右衛門は、内与力の案内で、大岡越前守がいる十二畳ほどの、離れの座敷に通じる渡り廊下まで通された。

「お奉行様。山田浅右衛門殿がお見えになりました」

内与力が廊下から大岡に障子越しに声を掛けた。

「おお、そうか。参ったか。では、これに通せ」

大岡は返事をする、読んでいた書物を横にやり、ゆっくりと腕を組んだ。やがて、緊張した面持ちで浅右衛門が部屋に入ってきた。

背筋を伸ばし正座すると、畳にきちんと両手を突き、やや平伏の姿勢で大岡に挨拶をした。「お奉行様には、ごきげんうるわしく……」

型どおりの浅右衛門の挨拶が始まった。

奉行職に就いて早五年、今年四十七になる大岡は、色白で、やや細面の端正な顔を浅右衛門に向けてと、左腕を脇息の上にゆっくり置いた。

紺の着物に同色の羽織。白模様の入った鼠の帯を締めた大岡は扇子を手元に置くと、

「ご苦労」

と一言。

「ははあ」

畏まる浅右衛門。

「まあ楽にせよ」

大岡は微笑みながら、硬くなっている浅右衛門に、やさしく声をかけた。

四半刻(約半時間)ほど刀や時候の話をし、茶菓子が出て、一息ついた浅右衛門を見た大岡は、「訊くが浅右衛門。そちが首を切った罪人の数は、どのくらいじゃ?」

右手に持った扇子の先を浅右衛門に向け、唐突に訊いた。

突然の問いに浅右衛門は当惑しつつ、何のことかと、少し詰まりながら、

「えっ。はっ、おおよそ、三百余りと心得まするが」

浅右衛門が野太い声で答える。

「三百か……。では先代は、いかほどか?」

大岡は矢継ぎ早に訊く。

「同じくらいと」

浅右衛門は、やや首を傾げながら、しばらく考えて答えた。

「同じくらいか……。のう浅右衛門、そろそろ家督を譲ってはどうかの?」

ゆっくりと諭すように、大岡は柔らかい口調で訊いた。

唐突な話に浅右衛門は、脇の下に冷や汗が流れるのを感じた。

——家督を譲る話か。隠居せよということだ。これは困った。

心中穏やかでない浅右衛門は、少し間をおいてから、口ぶりはゆっくりと、慌てる素振りを見せず、

「大岡様。この山田浅右衛門吉時、まだ五十前にて、腕前は、まだ若い者には引けを取りませぬ。いま、お役ご免ではこの腕が泣きまする」

と答え、長い左腕を浅右衛門は二三度、軽く叩くと、やや不満そうな顔で大岡の目を見た。

「そうか。では、浅右衛門。そちの腕前を、いま一度見たい。この近くの妙法寺の竹藪に行つて、一尺ほどの竹を切つてきてくれるか。住職にはもう話してある」

大岡は寺の方向を、扇子で示した。

「ははっ。おあいご用でございます。では、後ほど……」

挨拶を終えると、浅右衛門は役宅を出て妙法寺に向かった。



重厚な大門を入り、しばらく石畳みを歩いた。

広い玄関に着くと、浅右衛門は寺に案内を請うた。

寺男が浅右衛門を、よく手入れされた広い庭の奥にある、うっそうと茂る竹藪まで連れていった。

浅右衛門はしばらくの間、じつと竹藪全体をゆつくりと眺めていた。

そして、一本の長く真つ直ぐに延びた竹の前へ、竹の葉を踏みしめ、ゆつくりと歩いていった。

竹を下から上に見上げると、

「これがいい」と眩き、

「うむ」

一声、気合いを発した。

浅右衛門は羽織を脱ぐと、懐から出した襷を掛けた。

軽く一札をして、浅右衛門は二尺五寸（約七十七センチ）の備前物の刀を静かに抜き、間合いをはかつて、八双に構えた。

「えいっ」

一瞬、刃先が光り、鋭い気合いが寺の静寂を破った。

すばやく振り下ろされた刀で切られた竹は、葉が激しく擦れ合つて、根元に落ち、ゆつくりと横に倒れた。

残った竹は、浅右衛門の胸当たりで斜めに切れていた。

彼の着物は、竹の葉から落ちた朝露で、びっしょりと濡れていた。

紙入れから懐紙を取り出して刀を拭い、浅右衛門は、ゆつくりと鞘におさめた。そして静かに腰を落とすと、居合いの構えをとり、無言で抜き胴を横に払った。

徳利の栓が抜けたような音がして、一尺余りの竹が地面に転がった。

浅右衛門は「ふう」と息を深く吐き、懐紙で刀を拭つて鞘におさめ、羽織を着た。

満足そうな顔をして落ちた竹を拾い、風呂敷に包んだ。それを片手に持った浅右衛門は、



寺の門に続く道を、歩いて行った。



「うむ。見事な切り口。さすが浅右衛門じゃ」

浅右衛門が切った一尺余の竹の切り口を見て、大岡は彼の腕前を褒めた。

「ありがとうございます」

浅右衛門は、嬉しそうに深々と大岡に頭を下げる。

それを見て大岡は、少し険しい顔つきで浅右衛門に訊いた。

「ところで、浅右衛門。罪人の死刑執行時、彼等は皆、素直に首を差し出したかな？」

「いえ。ある者は首をすくめ、ある者は泣き喚き、また、ある者は恨み言を述べたり、悪態をついたりで、なかなか覚悟を決めて首を差し出す者は稀でございます」

かぶりを振って、浅右衛門は大岡に詳しく答えた。

「そうであろう、浅右衛門。誰も命は惜しい。皆、この世に未練を残しているからの。すんなりと首を差し出さない」

大岡は我が意を得たりと、膝を一つ叩くと大きく頷いた。

「はっ、そのとおりでございます。首を固く引っ込められては首切りになりませぬ。そこで『気

分が乗らぬ。本日の首切りは取りやめじゃ』と言うと罪人は、ホツとして、首を前に出すのでございます。そこを一気に『えいっ』と首を刎ねるわけでございます」

浅右衛門は興奮気味に、そして、やや自慢げに答えた。

「なるほど浅右衛門。お役目とはいえ、因果な仕事じゃ。首をはねる毎に、そちに恨みつらみが、積もることになるとは思わぬか？」

大岡は浅右衛門に、少し同情するような目付きをした。

「しかし、御奉行様」

浅右衛門は不服そうな顔をして、大岡を見た。

「なんじゃ？」

大岡が少し首を傾げて、訊いた。

「それがしは、御奉行様の命に従って首を切っているのでございます。現に、お白州でのお裁きに不満を持つ輩は、御奉行様の悪口を言いながら、首を切られる者も多うございます。誠に失礼ながら、恨みつらみが積もるのは、それがしではなく、切れと命じた御奉行様の方ではないかと存じます……」

浅右衛門は、大岡に反駁するような口ぶりで喋った。

「本当にそう思うか？ では訊くが浅右衛門、そちの着物は大変濡れているが、いかがいた

したのじゃ」

大岡は浅右衛門の濡れた着物を、指さした。

「これは大岡様の命で竹を切った時、竹の葉に朝露が付いていたため、濡れたのでございませす」

やや強い口調で、浅右衛門は答えた。

間髪を入れず大岡は言った。

「よいか、浅右衛門。よく聞け。竹を切れと命じた儂に、朝露は一滴も付いておらぬぞ。切ったお前に付いているのだ。浅右衛門、よくよくこのこと考えい。わかったか？ もう、そろそろ隠居せよ。家督のことは儂にまかせよ。よいな」

「ははあ」

浅右衛門は、おもわず両手を畳について平伏した。